

乳白粒の発生を抑制する 水稻品種「ふくみらい」の栽培法

福島県農業試験場 種芸部

平成14年度福島県農業試験場試験成績概要

分類コード 01-01-25132700

部門名 水稻－水稻－生育診断予測－施肥法－品質・食味

担当者 齋藤 隆・荒井義光

I 新技術の解説

1 要旨

「ふくみらい」は登熟期の高温や m^2 当たり粒数の過剰により乳白粒の発生が多くなり、玄米品質が低下しやすい。このため、乳白粒の発生を抑制する栽培法について明らかにした。

- (1) 良質な「ふくみらい」を生産するために最適な m^2 当たり粒数は3万5千粒程度。このときの基肥窒素施肥量は「ひとめぼれ」並の $0.6kg/a$ 程度である(図1)。
- (2) m^2 当たり粒数を3万5千粒確保し、倒伏を100以下に抑えるための幼穂形成期の指標は、草丈68cm以下、葉色(SPAD値)42以下であり、葉色(SPAD値)が42を超える場合は追肥を行わない(図2)。
- (3) 減数分裂期の葉色(SPAD値)が35を下回る場合、乳白粒は粒数の多少にかかわらず増加する。このため、葉色(SPAD値)が35を下回ると予測される場合は、減数分裂期(出穂前12日頃)に a 当たり $0.2kg$ 程度の追肥を行う(図3)。
- (4) 上記の条件で栽培を行うことにより、適正な m^2 当たり粒数が確保でき、乳白粒の発生を抑え、さらに蛋白質含有率を7%以下に抑えることができる(図4)。

2 期待される効果

「ふくみらい」の欠点である乳白粒の発生を抑え、玄米品質の向上と良食味米生産が可能となる。

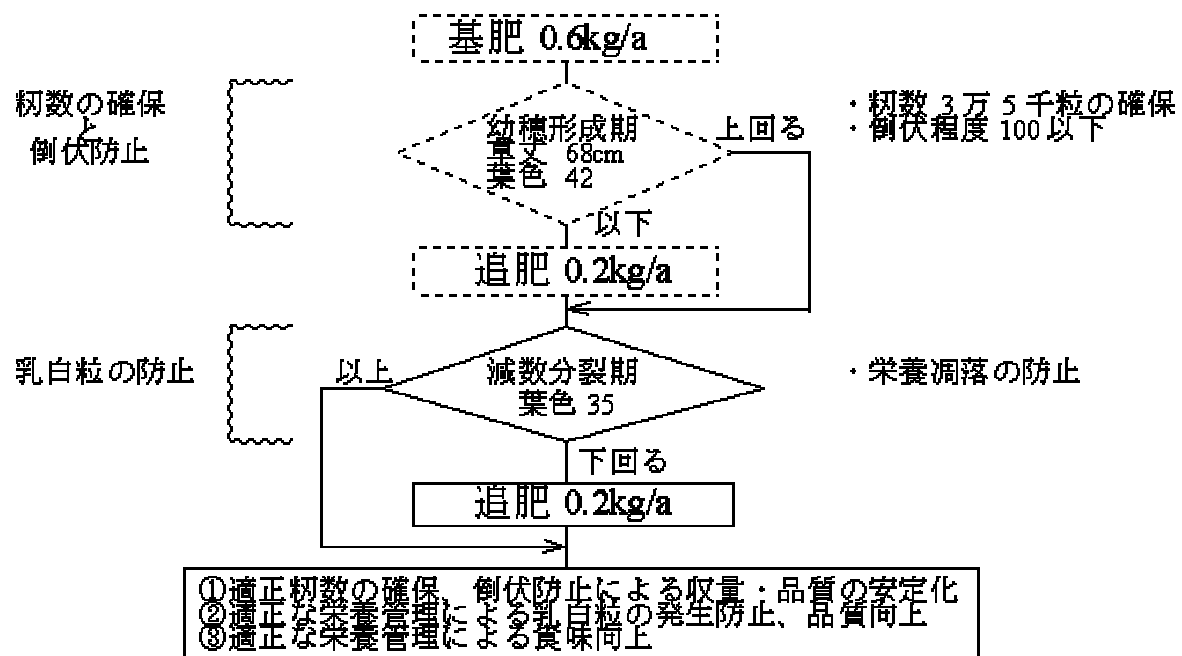
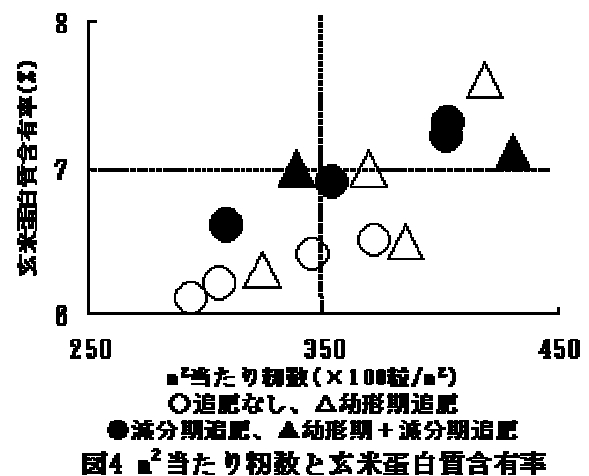
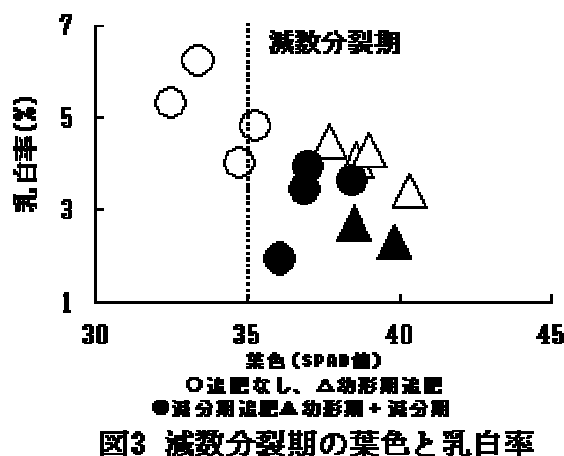
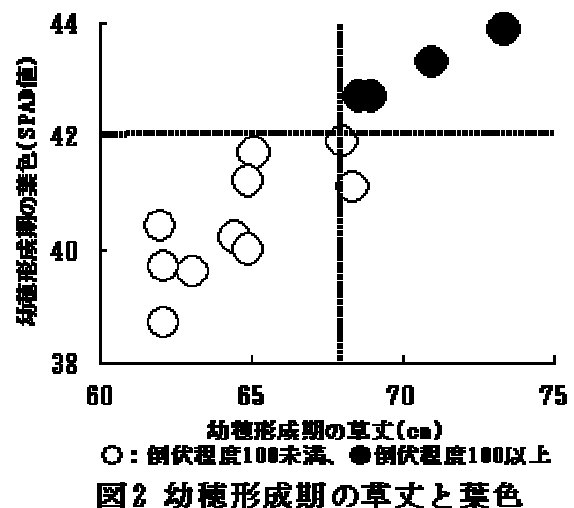
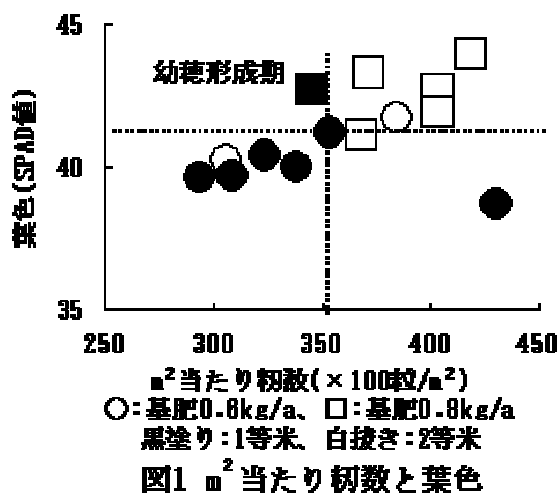
3 適用範囲

県内平坦部および山沿い地帯で「ふくみらい」が栽培されている地域

4 普及上の留意点

基肥量や追肥量は地域の地力や生産量により調節が必要である。

II 具体的データ等



Ⅲ その他

1 執筆者

齋藤 隆・佐藤 誠

2 主な参考文献・資料

なし